広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	東京国立博物館蔵『法然聖人傳繪』解説並びに影印・翻刻・索引
Author(s)	佐々木，勇；五阿弥，佳子
Citation	鎌倉時代語研究 , 19 : 235 - 315
Issue Date	1996-08-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00026703
Right	
Relation	

東京国立博物館蔵『法然聖人傳繪』解説並びに影印・翻刻・索引

佐々木　勇
五阿弥　佳子

解説

一、東京国立博物館蔵『法然聖人傳繪』について

法然についての絵巻としては、知恩院蔵四十八巻（国宝）が有名である。これは、わが国に現存する絵巻の最大規模のものであり、日本の宗教史・書道史・絵画史・民俗史などの上から貴重な資料であるため、たびたび影印・翻刻が世に出ている。(1)

また、法然の絵巻は、異本が多く作られた点で、他の絵巻と比較して、特異である。(2)

本稿で取りあげる東京国立博物館蔵『法然聖人傳繪』は、いわゆる琳阿本（妙定院蔵、全九巻）の巻第八にあたる一巻である。内題には、「法然聖人傳繪巻第八」とある。この巻では、法然の大谷帰還から往生、その供養を絵と詞とで記す。琳阿本と同じく九巻からなっていたものであろうが、現在、この巻第八以外は存在が知られていない。

作製時期は、「描法の諸特徴」から「鎌倉時代末期ころ」と推測されている。(3)

書誌的ことがらは、注中の参考文献に譲る。

二、詞書本文について

本資料の詞書は、本文の字体から、絵と同時期の十四世紀初頃に書かれたものと思われる。この詞書には、錯簡があることが指摘されている。(4)そこで、琳阿本の本文(5)と対比させると次の様になる。（琳阿本の順に並べる）

1～76行目　大谷帰還・天童出現・老病・紫雲出現

118～148　上人往生

77～117　初七日・二七日供養・粟田口禅尼霊夢・三七日供養
（欠）　四五七日・六七日・七七日供養の前半
156～165　七七日供養の後半
149～155　公胤霊夢

四五七日・六七日・七七日供養の前半を欠くが、琳阿本の巻八の詞書にほぼ一致する。琳阿本系の古本といわれる所以である。欠けている四五七日・六七日・七七日供養の前半部分は、琳阿本と対照すると、本資料の一紙分にあたる。伝えられる中で、紙の貼り直しが行なわれ、その際、錯簡・欠損が生じたものであろう。これは、本資料の歴史的価値を低めるものではない。

なお、詞書は漢字ひらがな交じりであるが、公胤の夢に法然が現われて語る部分（149～155行目）は、漢文体で書かれている。これは、夢のお告げの言葉の特殊性をあらわしたものであろう。

三、訓点について

本資料には、漢字に振り仮名・声点が加点されている。

漢字に付された振り仮名の大部分は、本文書写からさほど降らない時期の加点であろう。その訓点の仮名全体の中で、少々古いかと思われるものが存する。

功験（コウケン）（151）　者（ハ）（151）　雑善（ハ）（152）　専修（ハ）（152）　為（メニ）（153）　先（ッ）（154）

右のようなものであり、漢文の部分に見られる。この部分は、作成当初に書き込まれ、他の大部分の仮名はそれよりやや後のものかもしれない。訓点の大部分を占める片仮名には、本文の漢字を誤読したと見られる箇所もあり、本文書写者によって加点されたものかどうかは不明である。また、若干の後筆も存する（「翻刻」では、それを「　」に入れた）。

わずかながら見られる声点も、大部分の振り仮名と同時期の加点と見て良いであろう。

四、言語事象について

本資料詞書の言語事象について、この機会に若干を記したい。

I. 音韻・表記

A、漢字音

①唇内入声音の表記例は、全例「ウ」である。

②撥音韻尾m・nの表記例は、全例「ン」である。(6)

③ヰ・イとヱ・エとは、音韻上の区別による書き分けではない。

④合拗音の表記クヰ・クヱは見られない。すべてキ・ケとされる。(7)

⑤拗長音化を背景にして、リョウをレウ、ショウをセウとした例がある。

龍(レウ)(2)　勝(セウ)(82)

⑥声点加点例は、次の七例である。

逆(ケキ)(入濁)鱗(リン)(2)　権(コン)(去濁)中納言(ナコン)(16)　風俗(フウソク)(入濁)(84)　彼岸(ヒカン)(去濁)(89)　八幡宮(マンクウ)(去濁)(101)　神(シン)(去濁)宮(クウ)(106)　慈(シ)(去濁)覺(カク)大師(132)

すべて濁声点である。呉音声調にほぼ一致するが、去声加点字の「岸」は呉音平声であって合わない。(8)

B、国語音

「朝臣」の仮名表記に「アツソン」「アンソン」の両形が見られる。促音化の反映である。促音化例としては、他に「敬(ウヤマツ)て」がある。

II. 文法

係助詞「こそ」に「体言＋ヨ」が呼応する例が見られる。

あれこそ法然上人の御房の御躰(タイ)よ（103）

これは、鎌倉時代以降の新型とされている。(9)

III. 語彙

①「ミギリ」

「右」の意の語「ミギ」と「ミギリ」とについて、詳しく論じたのは山田忠雄であった。(10) 山田は、その時点で、ミギリの例が少なく、漢文の訓点での例が報告されていないとしている。

近時、柏谷直樹は、「高山寺法鼓臺旧蔵「佛説天地八陽神呪経」について」(11)の中で、十二世紀書写・加点の論文名中資料に「右(ミギ)ノ」とあることを指摘された。ただし、これは、「左(ヒダリ)ノ」の次文に対となって出現する例である。

本資料の例は、「病床(ヒヤウシヤウ)の右(ミギリ)にむかへたてまつりて云」という単独例であり、音便形でもなく、貴重である。

山田は、ミギリを口語と考えている。そのために文献に例が少ないのであれば、本資料の訓点は、口語を反映する部分があることになる。

②「ニンニン」

本資料125・126行目に「弟子五六人番(ハン)〻に助音(シヨイン)す助音(シヨイン)の人〻は窮屈(キウクツ)にをよふといゑとも」という箇所がある。この「人〻」は、本資料の本文で字音読語の繰り返しを示す畳符を用いているところから、「ニンニン」と読んだものと思われる。「ヒトビト」の場合には、「人〳〵」とされる（18行目参照）。

「ニンニン」は、多くの人ではなく、「助音（ショイン）の人」一人一人を指す。その意味で『日葡辞書』にも掲載されているが、本資料の例は比較的早いものであろう。(12)

五、本資料の影印・翻刻・索引について

法然の絵巻のうち知恩院蔵本以外は、辞典・目録・図録などに何枚かの写真が掲載されることはあったが、その全貌が写真で紹介されることはなかった。そのような中で、近年、『東京国立博物館図版目録　やまと絵篇』（東京美術、一九九三年）で東京国立博物館蔵本の全体が掲載され、有益である。ただし、この目録では、やまと絵としての紹介であり、詞書を判読するのには写真が小さい。また、詞書の本文の漢字には振り仮名および声点が加点されているものがあり、国語史研究上重要であるが、それが読みとりにくいという恨みが残る。そこで、東京国立博物館のご許可を得て、あえて再度の写真掲載をするものである。

また、本資料の詞書全文の翻刻は、関忠夫「重要文化財　法然上人絵伝」（「MUSEUM」No.275、一九七四年二月）のなかで、既に成されている。しかし、そこでは、本文の漢字に付された訓点はすべて省略されている。また、本文の読解にも従いがたい点が存する。そこで、あらたに索引の本文として翻刻を試みた次第である。

本資料は、全体で一六五行という極めて短いもので、言語量は少ないが、国語史上重要と考え、語彙索引・漢字索引を作成した。

なお、本稿を成すにあたり、東京国立博物館蔵の原本閲覧の機会を与えていただいた。東京国立博物館の皆様に深く感謝したい。

注

(1) 比較的近いものでは、次のような出版がある。『続日本絵巻大成　1・2・3』(中央公論、一九八一年)、『続日本の絵巻　1・2・3』(中央公論、一九九〇年)。

(2) 『法然上人伝の成立史的研究』第三巻　研究篇(知恩院、一九六二年)参照。

(3) 「日本の美術　No.95　法然上人絵伝」(至文堂、一九七四年)の解説。

(4) 関忠夫「重要文化財　法然上人絵伝」(「MUSEUM」No.275、一九七四年二月)。

(5) 『浄土宗全書』十七による。

(6) ただし、後筆「殯(ヒム)」の一例がある。また、本行平仮名の「めむ〳〵(面々)に」(12)の例があるが、別扱いにすべきであろう。

(7) ただし、不審例「悔(クヱ)」の一例がある。

(8) 入声以外は、すべて去声の加点例であることと関係があるかもしれないが、例数が少ないため不明である。

(9) 大野晋『係り結びの研究』(一九九三年、岩波書店)一六一頁参照。

(10) 「ミギとミギリ」(『金田一博士古稀記念　言語民俗論叢』〈三省堂、一九五三年〉所収)。

(11) 『築島裕博士古稀記念　国語学論集』(汲古書院、一九九五年)所収。

(12) 『日本国語大辞典』(小学館)には、最も古い例として『風姿花伝』が引かれている。

〔付記〕　本稿は、比治山女子短期大学専攻科の平成七年度授業「国語学特講Ⅰ」の成果である。受講生は、五阿弥佳子であった。本稿の担当は、次の通りである。解説：佐々木勇、翻刻：佐々木勇・五阿弥佳子、語彙索引：佐々木勇・五阿弥佳子、漢字索引：佐々木勇。

翻刻凡例

一、この翻刻は、東京国立博物館蔵『法然上人傳繪』を底本として、その詞書の全文を、底本の行取り・漢字かな交じり文のままに翻字したものである。仮名遣・振り仮名・返点の状態をもできるだけ底本に忠実に示そうとした。

一、漢字の字体は、底本の字体にできる限り忠実に活字化した。いわゆる誤字・俗字も底本のままに翻字した。

一、ひらがな・片仮名の字体は、印刷の便を考えて、現行の字体に改めた。底本の字体については、影印を参照されたい。

一、本文の振り仮名には後筆と見られるものがある。これは、「　」に入れて区別した。

一、踊り字は、底本にしたがって、ゝ・ゝ・ゞ・〳〵で翻字した。

一、注記は、翻刻の最後に一括した。

1 法然聖人傳繪巻第八

2 建暦元年辛未十一月廿日龍顔逆（入濁）鱗の

3 いましめをやめて烏頭變毛の宣旨を

4 かうふれり勝尾隠居の後鳳城に還

5 歸あるへきよし　太上天皇順徳天皇院宣

6 を下さる　仍吉水の前大僧正慈圓の

7 御沙汰として大谷の禪房に居たて(1)

8 まつらる

9 昔釋尊忉利の雲より下給しを人天

10 大會よろこひおかみたてまつりしか

11 ことく上人南海の浪をさかのほり

12 給へは道俗男女めむ〳〵に供養を

13 のへたてまつること一日夜のうちに

14 三千餘人と云ゝ幽閑の地をしむと

15 いゑとも貴賤高卑あつまり參事

16 さかりなる市のことし權（去濁）中納言光親

17 卿奉行にて歸京のよし仰出され侍

18 けりこの時にあたりて人〳〵本望

19 やすまりぬ或雲客夢にみらく上人

20 參内の時天童五人雲にのりて管(2)

21 絃(3)遊戯す天蓋をさしおほいたて

22 まつる夢さめて聞(4)に上人内裏へ

23 参たまへり不思議なりし事也
24 建暦二年壬申正月一日より老病そら
25 に期して蒙昧身にいたれりまつ所
26 たのむところまことによろこはしき
27 かなとて高聲念仏不退也或時弟子に
28 告てのたまはく我もと天竺にありて
29 聲聞僧にましわりて頭陀を行き
30 いま日本國に来て天台宗を學て
31 又念仏をすゝむ身心に苦痛なく蒙
32 昧たちまちに分明也抑　我往生は
33 一切衆生結縁のため也我もと居せ
34 しところなれはかへりゆくへしたゝ
35 人を引導せむと思と云ゝ
36 十一日の辰の時上人おきゐて高聲
37 念仏し給きくひと皆涙をなかす弟
38 子等につけてのたまはく高聲念仏す
39 へし阿弥陀佛のきたりたまへる也この
40 佛の名号を唱れは一人も往生せす
41 と云事なしといひて念佛の功徳を
42 讃嘆したまふことあたかも昔のこ
43 とし上人またのたまはく觀音勢至
44 等の菩薩聖衆現前したまへり各

45 おかみたてまつるにやいなやと弟子等を
46 かみたてまつらすと云ゝこれをきゝて
47 いよ〳〵念仏せよとすゝめ給そのゝち弟
48 子等臨終のために三尺の弥陀の像を
49 病床の右にむかへたてまつりて云この
50 佛おかみたまふへしと于時上人
51 ゆひをもちてそらをさしてのたまはく
52 此佛の外に又佛おはしますおかむや
53 とすなわちかたりて云凡この十餘季
54 よりこのかた念仏功つもりて極樂の
55 荘嚴をよひ佛菩薩等の身を見たて
56 まつること是恒のこと也しかれとも年
57 來これをいはすいま没後にのそめり
58 故にしめすところなり又弟子等佛の
59 御手に五色の糸を付てすゝむれは
60 これをとりたまはす上人のたまはくか
61 くのことときの事はこれつねの人の
62 儀式なり我みにをきてはいまかならすし
63 もしかるへからすと云てつるにこれ
64 をとりたまはす廿日巳時紫雲優徳
65 として坊の上に垂布せりなかく
66 たなひきて又圓形の雲もあり圖繪

67 の形像の圓光のことくして五色鮮

68 潔なり路次往反の人處〻にこれをみ

69 る弟子申さくこのうゑに紫雲まさ

70 につらなれり往生のちかつき給へるか

71 と上人きゝてのたまはくあはれなるかな

72 わか往生は一切衆生をして念仏を信

73 せしめむかためなりと末時にことに

74 めをひらきて西方へみをくり給事

75 五六返看病の人問て云佛の来給

76 かと答てのたまはくしかなりと云ゝ

77 その時建暦二年壬申正月廿五日午の

78 正中遷化行年満八十伏惟は釋尊圓寂の

79 月にすゝめる一月荼毗の燈ことなりと

80 いへとも弥陀感應の日にしりそくこと

81 十日利生の風これをなしきをや

82 觀音垂迹の勝地勢至方便の善巧かく

83 のことししかうしてのち門弟等世間の

84 風俗(入濁)にまかせて遺骨をおさめ中陰

85 の孝行をいたす初七日御導師信蓮坊

86 不動尊を供養す大宮入道大臣家の

87 諷誦の文云夫以先師存生のむかし弟子

88 遁朝のゆふへ一心精進の誠を凝て

89 十重戒をうく故に得度を彼岸(去濁)に
90 たのみて敬て諷誦を此砌 に修す小善
91 根と 嫌(キラウ) 事なかれかならす大因縁と
92 ならん仍蓮臺の妙業をかさらむか
93 ために早 鳧鐘の蓮韻を叩 別當
94 前周防守源 朝臣盛親敬白二七日普賢
95 菩薩御導師求佛坊云ゝ建暦 二年
96 二月三日夜別當惟方入道の娘 粟田
97 口の禪尼夢にみらく上人 殯(ヒム)葬
98 の所に參 たれは八幡宮の御戸をひら
99 くかとおほゆ御正躰等そのうちにおは
100 しますときにこれは上人の葬送
101 のところにはあらす八幡宮(去濁)也とおもへ
102 はかたわらの人その御正躰をさして
103 云あれこそ法然上人の御房の御躰よと
104 いふこれを聞て身の毛竪てあせを
105 なかしてさめぬこの夢又奇特なり
106 抑 神(去濁)宮皇后(6) 元年 辛巳 大菩薩御誕生
107 の時八の幡ふりき故に八幡大菩薩
108 と号したてまつるいまの上人誕生の
109 時ふたつのはたふれり大菩薩の
110 御本地を行 教和尚 みたてまつらん

111 と祈願したまひしかは袂のうへに阿弥陀

112 如来うつりたまひき三七日弥勒導師

113 住真坊弟子湛空誦経物をさゝく義

114 氏か摺本一紙をもちて十二行八十餘

115 字

116 西へよしゆくへき道のしるへせよ

117 むかしもとりのあとはありけり

118 抑七八年の初當或雲客兼隆朝臣夢に

119 みる様上人御臨終の時は光明遍照

120 の四句の文を唱給へしと云ゝこゝに

121 上人廿三日以後三日三夜あるいは一時

122 或は半時高聲念仏不退のうゑこと

123 に廿四日酉尅より廿五日の巳尅にいたる

124 までは高聲念仏躰を「セメテ」責無間なり

125 弟子五六人番〻に助音す助音の

126 人〻は窮屈にをよふといゑとも老躰

127 病悩の身高聲念佛勇猛にして

128 をこたらす参集せる道俗見聞せる

129 老少讃嘆せすと云事なし午の時(8)

130 到て念仏の聲やうやくかすかにて

131 高聲は時〳〵あひましはるまさしく

132 寂後に望時は年来所持の慈(去濁)覺大師

133 の九條の袈裟をかけて頭北面西に

134 して光明遍照十方世界念佛衆生攝

135 取不捨の文を誦して念佛のいき絶

136 たまひぬ聲止てのちなをくちひる

137 舌を動事十餘遍計也于時春秋

138 滿八十夏臈六十六身躰柔軟にして

139 容皃つねのことし恵燈すてにきえ

140 法身また没して貴賤哀慟して考妃

141 を喪せるかことしこゝに弟子等も憂

142 悲啼哭しなから彼砌に葬し

143 たてまつる季節いかなることそや

144 釋尊滅をとなへたまひ上人滅をとな

145 うかれは二月中旬の五日也これは正月

146 下旬の五日なり八旬いかなるとしそや

147 釋尊も滅をとなへ給上人滅をとなう

148 かれも八十なりこれも八旬也

149 その夜の夢に上人公胤に告云往生の

150 業の中に一日六時一心不乱念する

151 功驗最第一なり六時稱名者往生必

152 決定雜善不決定一専修決定善源一

153 空為孝養一公胤能説法成善一不可盡一

154 臨終先迎接源空本地身大勢至菩

155 薩(ナリ)衆生為(ヲタメノケセンユヘニ)化(キタルコトコノカイニトヽ)故(ナリト)　來(ニ)此界(ニ)度(ス)云(ハヽ)

156 をの〳〵一部開眼(フカイケンカイタイ)開題一心の懇(コン)志

157 三寶知見したまへと云ゝ凡このあひ

158 た佛事いとなみ諷誦を捧(サヽクル)人是多(コレヲヽシ)

159 僧正唱導を望(ノソミ)給へる故は上人

160 所造(サウ)の選擇(センチヤク)集を破(ハ)せむかために

161 浄土決疑抄(キショ)三巻(クワン)をつくる上人

162 面謁(メンカツ)の時重(テウ)〻の問答(モンタウ)にこと〳〵く

163 くつかへされて悔悲(クヱカナシミ)てみつから燒(ヤキ)

164 すてゝ歸伏(キフク)しぬなをそのとかをかなし

165 みて没後(モツコ)の導師(タウシ)をつとめけり

注

(1) 「天」のかなの下欠と見る。
(2) 「曽」と見ての注か。
(3) 「結」と見ての注か。
(4) 「問」と見ての注か。
(5) 「テ」の欠損か。
(6) 「コク」ママ。
(7) 「イハ」を擦り消し。
(8) 「に」が有ったか。

語彙索引凡例

一、この索引は、東京国立博物館蔵『法然上人傳繪』に用いられているすべての語を、翻字本文にもとづいて、収載したものである。

一、各項の記載形式は、見出し語・本文の用例・用例の所在行数、とした。

一、見出し語は、ひらがなで歴史的仮名遣（字音語は字音仮名遣）によって統一し、濁点を附した。いわゆる清濁の識別は、決定困難なものが少なくないが、当時の文献などを参考として定めた。そのうえで、排列は最終音節までの五十音順とした。

一、用例は、翻字本文に基づき、その表記に従った。

一、用例は、自立語で活用しないものはその語を掲げることを原則とし、自立語で活用するものはそれに続く語をも掲出した。また、付属語は、その語の前後も掲出した。

一、用例は、すべて出現順に掲出した。ただし、同一の例は初出の例の所在行数の下に行数を加えるのみとした。

一、用例の所在は、原本の詞書の行数で示した。これは、翻字本文の行数とも一致する。

あ

あいたい（「アイタイ」）（靉靆）　偃（アイタイ）徳として　64
あいどうす（哀慟）　哀慟（アイドウ）して　140
あき（秋）→はるあき
あせ（汗）　あせ　104
あそん（朝臣）→かねたかの　あそん・みなもとのあそん　もりちか
あたかも（恰）　あたかも　42
あたる（当）　あたりて　18
あつそん（朝臣）→あそん
あつまる（集）　あつまり参事　15
あと（跡）　あと　117
あはたぐち（粟田口）　粟田口（アワタクチ）　96
あはれ（哀）　あはれなるかな　71
あひだ（間）　あひた　157
あひまじはる（合交）　あひましはる　131
あみだによらい（阿弥陀如来）　阿弥陀如来　111
あみだぶつ（阿弥陀佛）　阿弥陀佛　39
あらず（非）　あらす　101
あり（有）→あらず　あるへき　5　ありて　28　あり　66　ありけり　117
ある（或）　或（アル）　19　118
あるいは（或）　あるいは　或（アルイ）は　121
あるとき（或時）　或時（アルトキ）　27
あれ（彼）　あれ　103

い

いうかん（幽閑）　幽閑（イウカン）　14
いかなる（如何）　いかなる　143　146
いき（息）　いき　135
いご（以後）　以後（イゴ）　121
いたす（致）　いたす　85
いだす（出）→おほせいだす
いたる（到）　いたれり　25　いたるまては　到（イタリ）て　123　130
いち（市）　市（イチ）　16
いちし（一紙）　一紙（シ）　114
いちじ（一時）　一時　121
いちしむ（一心）　一心　88　156
いちしむふらん（一心不乱）　一心不乱（ラシンニ）　150
いちにち（一日）　正月一日　24　一日　150
いちにちや（一日夜）　一日夜　13
いちぶ（一部）　一部（ブ）　156
いつさいしゆじやう（一切衆生）　一切衆生　33　72
いと（糸）　糸（イト）　59
いとなむ（営）　いとなみ　158
いな（否）　いなや　45
いはく（云）　云（ク）　49　53　75　87　103　149
いふ（云）　云事　41　129
いひて
いはす　57

云て
いふ 63
いへども（雖）
いゑとも 104
いへとも
いま（今）
いま 15 126
いましめ（戒）
いましめ 30 57 62 108
いよいよ（彌）
いよ〳〵 80
いんきよ（隱居）
隱居 3
いんだうす（引導）
引導せむ 47
う
うく（受）
うく 4
うごかす（動）
動事 35
うち（内）
うち 89
うつる（映）
うつりたまひ 13 99 137
うとうへんもう（烏頭変毛）
烏頭變毛 112
うひ（憂悲）
憂悲 3
うへ（上）
上 69 122 141
うゑ 65
うへ 111
うま（午）→うまのとき
午 77
うまのとき（午時）
午の時 129
うやまふ（敬）
敬て 90
うんうん（云々）
云〻 14 35 46 76 95 120 155 157
うんかく（雲客）
雲客 19 118
お
おきゐる（起居）
おきゐて 36
おく（置）
をきては 62
おくる（送）→みおくる
凡 53 157
おこたる（怠）
をこたらす 128
おこなふ（行）
行き 29
おなじ（同）
をなしきをや 81
おのおの（各）
各〻 44
をの〳〵 156
おはします（御座）
おはします 52
おはしますとき 99
おほし（多）
多し 158
おほせいだす（仰出）
仰出され 17
おほたに（大谷）
大谷に 7
おほふ（覆）→さしおほふ
おほみやにふだう（大宮入道）
大宮入道 86
おぼゆ（覚）
おぼゆ 99
おほよそ（凡）
凡 53 157
おむ（御）→ご
おむて（御手）
御手 59
おむと（御戸）
御戸 98
おもふ（思）
思と 35
おもへは 101
おもんみる（惟・以）
伏惟は 78
夫以 87
および（及）
をよひ 55
およぶ（及）
をよふと 126
か
か《助詞》
ちかつき給へるかと 70
来給かと 76
ひらくかと 99
が《助詞》
おかみたてまつりしかこ 10
とく
信せしむかためなり 73

かさらむかために
義氏か摺本　114
喪せるかことし　141
破せむかために　160
かい（界）
界　155
かいげん（開眼）
開眼　156
かいだい（開題）
開題　156
かう（行）→じふにかう
かうしやう（高聲）
高聲　131
かうしやうねむぶつ（高聲念仏）
高聲念仏　27 36 38 122
高聲念佛　124
がうす（号）
号したてまつる　108
がうせふす（迎接）
迎接　154
かうひ（考妃）
考妃　140
かうひ（高卑）→くゐせんか
うひ　92
かうぶる（被）
かうふれり　4
かうやう（孝養）
孝養　153
かく（掛）
かけて　133
かく（斯）
かく　60 82
がく（學）→まなぶ
かざる（飾）
かさらむ　92
かすか（微）
かすかにて　130
かぜ（風）
風　81
かたはら（傍）
かたわら　102
かたる（語）
かたりて　53
かつを（勝尾）
勝尾　4
かな《助詞》
よろこはしきかなとて　27
あはれなるかな　71
かなしむ（悲）
悔悲て　163
かなしみて　164
かならず（必）
かならす　91
必　151
かならずしも（必）
かならすしも　62
かねたかのあそん（兼隆朝臣）
兼隆朝臣　118
かの（彼）
彼　142
かのとのひつじ（辛未）
辛未　2
かのとのみ（辛巳）
辛巳　106
かへりゆく（帰行）
かへりゆくへし　34
かみ（守）→すはうのかみ
からふ（夏臈）
夏臈　138
かるがゆゑに（故）
故に　58
かれ（彼）
かれ　145 148
かんおう（感應）
感應　80
かんびやう（看病）
看病　75
き
き《助動詞》
下給しを　9
おかみたてまつりしかこ　10
とく　23
不思議なりし事也　29
行き　33
居せしところ　107
ふりき　111
祈願したまひしかは　112
うつりたまひき　126
きうくつ（窮屈）
窮屈
きく（聞）
聞に　22
きくひと　37
きゝて　46 71
聞て　104
きぐわんす（祈願）
祈願したまひ　111

ぎし（義氏）
義氏 113
ぎしき（儀式）
儀式 62
きせつ（季節）
季節 143
きたる（来）
来て 30
きたりたまへる
来給か 39
來給ルコト 75
きとく（奇特）
奇特なり 155
きやう（卿）→みつちかのきやう 105
ぎやう（行）→かう
ぎやうけうくわしやう（行教和尚）
行教和尚 110
ぎやうざう（形像）
形像 67
ぎやうねん（行年）
行年 78
きゆ（消）
きえ 139
きよす（居）
居せし 33
きらふ（嫌）
「キラウ」嫌事 91
く
くだす（下）
下さる 6
くだる（下）
下給し 9
くちびる（唇）
くちひる 136
くつう（苦痛）
苦痛 31
くつがへす（覆）
くつかへされて 163
くでう（九條）
九條 133
くどく（功徳）
功徳 41
ぐぶつばう（求佛坊）
求佛坊 95
くも（雲）
雲 9 20 66
くやう（供養）
供養 12 86
くゆ（悔）
悔 悲 て 163
くらう（苦労）
苦痛 31
くわうごう（皇后）→じんぐうくわうごうぐわんねん
くわうみやうへんぜう（光明遍照）
光明遍照 119 134
くわしやう（和尚）→ぎやう
けうくわしやう・じゑんじ
ちんくわしやう
くわんおん（観音）
観音 43 82
くわんくゑ（還歸）→ぐゑんくゑ
くわんぐゑん（管絃）
管絃 20
くわんだいはち（巻第八）
巻第八 1
ぐわんねん（元年）→けんりやくぐわんねん・じんぐうくわうごうぐわんねん
くゑきやう（歸京）
歸京 17
くゑせん（貴賤）
貴賤 140
くゑせんかうひ（貴賤高卑）
貴賤高卑 15
くゑふくす（歸伏）
歸伏しぬ 164
くゑ（悔）→くゆ
くゑす（化）
化 155
ぐゑんくう（源空）
源空 152
源空 154
ぐゑんくゑ（還歸）
還歸 4
け
け（毛）
身の毛
けいびやく（敬白）
敬白 104
けうぎやう（孝行）
孝行 94
げきりん（逆鱗）
逆（入濁）鱗 85
2

けさ（袈裟）
袈裟　133
げじゆん（下旬）
正月下旬　146
けつえん（結縁）
結縁　33
けつぢやう（決定）
決定　152 152
不決定　152
けり《助動詞》
仰出され侍けり　18
ありけり　117
つとめけり　165
げんぜんす（現前）
現前したまへり　44
けんもんす（見聞）
見聞せる　128
けんりやくぐわんねん（建暦元年）
建暦元年　2
けんりやくにねん（建暦二年）
建暦二年　24 77 95

こ

ご（御）→ごさた・ごしやう
たい・ごたい・ごだうし・ごたんじやう・ごばう・ごほんぢ・ごりむじゆう
こう（功）
功　54
こういん（公胤）
公胤　149
公胤　153
こうげん（功験）
功験　151
こく（尅）→とりのこく・みのこく
ごくらく（極楽）
極楽　54
ここに（此処）
こゝに　120 141
ごさた（御沙汰）
御沙汰　7
ごしき（五色）
五色　59 67
ごしやうたい（御正体）
御正躰　99 102
ごす（期）
期して　25
こそ《助詞》
あれこそ法然上人の御房の御躰よ　103
ごたい（御体）
御躰　103
ごだうし（御導師）
御導師　85 95
こたふ（答）
答へて　76
ごたんじやう（御誕生）
御誕生　106
こと（事）
こと　13 42 56 56 80 143
事　15 23 41 61 74 91 129 137
コト　153 155
こと（異）→ことに
ことなり　79
ことごとく（悉）
ことゝくく　162
ごとし（如）
ごとく　11
ごとし　16 42 83 139 141
こときの　61
ことくして　67
ことに（異）
ことに　73 122
ごにち（五日）
五日　145 146
ごにん（五人）
五人　20
この（此）
この　18 39 49 53 69 105 157
此　52
此　90 155
このかた（此方）
このかた　54
ごばう（御房）
御房　103
ごふ（業）
業　150
ごほんぢ（御本地）
御本地　110
こらす（凝）
「コラシ」凝て　88
ごりむじゆう（御臨終）
御臨終　119
これ（是）
これ　46 57 60 61 63 68 81 100 104 145 148
是　56 158
これかたにふだう（惟方入道）

惟方入道（コレカタ）
ごろくにん（五六人）　96
五六人　125
ごろくへん（五六返）
五六返　75
こゑ（聲）　130
聲（コエ）　136
こんし（懇志）
懇志（コン）　156
ごんちうなごん（権中納言）
權（コン）（去濁）中納言（ナコン）　16

さ

さいご（最後）
最後（サイコ）　132
さいはう（西方）
西方　74
ざう（像）
像（サウ）　48
さうす（喪）
喪（サウ）せるかことし　141
さうす（葬）
葬（サウ）したてまつる　142
さうそう（葬送）
葬送（サウソウ）　100
さかのぼる（遡）
さかのぼり給へは　11
さかり（盛）
さかりなる　16
さき（前）
前（サキノ）　6　94
ささぐ（捧）
さゝく　113
捧（サヽクル）人　158
さしおほふ（差覆）
さしおほいたてまつる　21
さす（指）
さして　51　102
さた（沙汰）→ごさた
ざふぜん（雑善）
雑善　152
さぶらふ（侍）
侍けり　17
さむ（覚）
さめて　22
さめぬ　105
さむくわん（三巻）
三巻（クワン）　161
さむしちにち（三七日）
三七日　112
さむじやく（三尺）
三尺（シヤク）　48
さむじゆす（参集）
参集（サンシユ）せる　128
さむぜんよにん（三千餘人）
三千餘（ヨ）人　14
さむだい（参内）
参内（サンダイ）　20
さむにち（三日）
二月三日　96
さむにちさむや（三日三夜）
三日三夜　121
さむぼう（三寶）
三寶　157
さむや（三夜）→さむにちさむや
さんたんす（讃嘆）
讃嘆（サンタン）したまふ　42
讃嘆（サンタン）せす　129

し

じ（字）→はちじふよじ
しうん（紫雲）
紫雲（シウン）　64　69
しか（然）
しかなり　76
しかうして（而）
しかうしてのち　83
じかくだいし（慈覺大師）
慈（シ）（去濁）覺（カク）大師　132
しかり（然）
しかるへからすと　63
しかれども（然）
しかれとも　56
しく（四句）
四句（ク）　120
した（舌）
舌（シタ）　137
しちはちねん（七八年）
七八年　118
じちん（慈鎮）→じゑんじちんくわしやう
して《助詞》
御沙汰として大谷（ヨヽタニ）の禪房（センハウ）に居たてまつらる　7
「偃鎧（アイタイ）」として坊の上に垂（スイ）布（フ）せり　65
ことくして五色鮮潔（シキセンケツ）なり　67
一切衆生をして念仏を信せしめむ　72

勇猛にしてをこたらす　127
頭北面西にして光明遍照……の文を誦して　134
柔軟にして容兒つねのことし　138
じふいちぐわつ（十一月）
十一月　2
じふいちにち（十一日）
十一日　36
じふぢうかい（十重戒）
十重戒　89
じふにかう（十二行）
十二行　114
じふにち（十日）
十日　81
じふはうせかい（十方世界）
十方世界　134
じふよねん（十餘年）
十餘年　53
じふよへん（十餘遍）
十餘遍　137
しむ（占）
しむ　14
しむ《助動詞》
信せしめむかため　72

しめす（示）
しめすところなり　58
しやうぐわつ（正月）
正月　24 77 145
しやうごむ（莊嚴）
莊嚴　55
しやうじゆ（聖衆）
聖衆　44
しやうじん（精進）
精進　88
しやうたい（正躰）→ごしやうたい
しやうだう（唱導）
唱導　159
しやうちう（正中）
正中　78
じやうどけつぎしよう（淨土決疑抄）
淨土決疑抄　161
しやうにん（上人）→ほふねんしやうにん・ほふねんしやうにんでんゑ
上人　11 19 22 36 43 50 60 71 97 100 108 119 121 144 147 149 159 161
しやうもんそう（聲聞僧）

聲聞僧
しやくそん（釋尊）
釋尊　9 78 144 147
じゆきやうもつ（誦經物）
誦經物　113
しゆじやう（衆生）→いつさいしゆじやう・ねむぶつしゆじやう
衆生　155
しゆす（修）
修す　90
じゆす（誦）
誦して　135
しゆんじう（春秋）
春秋　137
じゆんとくてんわう（順徳天皇）
順徳天皇　5
じよいん（助音）
助音　125 125
しようち（勝地）
勝地　82
しようみやう（稱名）
稱名　151

しよざう（所造）
所造　160
しよしちにち（初七日）
初七日　85
しよしよ（處々）
處々に　68
しよたう（初當）
初當　118
しよぢ（所持）
所持　132
しりぞく（退）
しりぞくこと　80
しるべ（導）
しるへ　116
じゑんじちんくわしやう（慈圓慈鎮和尚）
慈圓慈鎮和尚　6
じんぐうくわうごうぐわんねん（神宮皇后元年）
神宮皇后元年　106
しんしむ（身心）
身心　31
しんず（信）
信せしめむ　72
しんたい（身躰）

身躰（シンタイ） 138
しんれんぼう（信蓮坊） 85
信蓮坊（シンレンボウ）

す

す（為）→あいとうす・いんだうす・がうす・がうせつす・きぐわんす・きよす・くゐふくす・くゑす・げんぜんす・けんもんす・ごす・さうす・さんじゆす・さんたんす・しゆす・じゆす・しんず・すいふす・せつほふす・ちけんす・ていこくす・ねむず・はす・もつす・
ゆげす
高聲（カウシヤウ）念仏し給 37
高聲（カウシヤウ）念仏すへし 38
往生せす 40
念仏せよと 47
供養す（クヤウ） 86
しるへせよ 116
助音す（ショイン） 125
ず《助動詞》→あらず
往生せすと 40
をかみたてまつらすと 46
いはす 57
とりたまはす 60 64
しかるへからすと 63
をこたらす 128
讃嘆（サンタン）せすと 129
不決定（ナラ）一 152
不可盡一 153
すいじやく（垂迹）
垂迹（スイシヤク） 82
すいふす（垂布）
垂布（スイフ）せり 65
すう（居）
居（ス）たてまつらる 7
すすむ（進）
すゝめる 79
すすむ（勧）
すゝむ 31
すゝめ給 47
すゝむれは 59
すつ（捨）→やきすつ 124
すでに（既）
すてに 139
すなはち（即）
すなわち 53
すはうのかみ（周防守）
周防守（スハウノカミ） 94
すりほん（摺本）
摺本（スリホン） 114

せ

せいし（勢至）
勢至 43 82
せうぜんこん（小善根）
小善根 90
せかい（世界）→じふはうせかい
せけん（世間）
世間 83
せつほふす（説法）
説法（セツホウス） 153
せふしゆふしや（攝取不捨）
攝取不捨 134
せむ（責）
責（セメテ） 124
ぜん（善）
善 153
せんぐゑ（遷化）
遷化（センケ） 78
ぜんげう（善巧）
善巧（センケウ） 82
せんけつ（鮮潔）
鮮潔（センケツ）なり 67
せんし（先師）
先師（センシ） 87
せんじ（宣旨）
宣旨（センシ） 3
せんしう（専修）
専修 152
せんぢやくしふ（選擇集）
選擇集（センチヤクシフ） 160
ぜんに（禪尼）
禪尼（センニ） 97
ぜんばう（禪房）
禪房（センバウ） 7

そ

そうじやう（僧正）
僧正 159
その（其）→そののち
その 77 99 102 149 164
そのかみ（初當）
初當（ショタウ） 118
そののち（其後）
そのゝち 47

そもそも（抑）
抑　32 106 118
ぞや《助詞》
いかなることそや　143
いかなるとしそや　146
そら（空）
そら　51
そらに（空）
そらに期して　24
それ（夫）
夫以　87
ぞんしやう（存生）
存生　87

た

たい（躰）→ごたい
躰　124
だいいち（第一）
第一なり　151
だいいんえん（大因縁）
大因縁　91
だいし（大師）→じかくだいし
たいじやうてんわう（太上天皇）
太上天皇　5
だいじんけ（大臣家）
大臣家　86
だいせいしぼさつ（大勢至菩薩）
大勢至菩薩　154
だいそうじやう（大僧正）
大僧正　6
だいはち（第八）→くわんだいはち
だいぼさつ（大菩薩）→はちまんだいぼさつ
大菩薩　106 109
だいり（内裏）
内裏　22
だうし（導師）→ごだうし
導師　112
導師　165
だうぞく（道俗）
道俗　12
道俗　128
たうり（忉利）
忉利　9
ただ（只）
たゝ　34
たたく（叩）
叩　93
たちまちに（忽）
たちまちに　32
たつ（竪）
竪て　104
たつのとき（辰時）
辰の時　36
たてまつる（奉）
居たてまつらる　7
おかみたてまつりしかのへたてまつること　10
さしおほいたてまつる　13
おかみたてまつるにやをかみたてまつらすと　21
むかへたてまつりて　45
見たてまつること　46
号したてまつる　49
みたてまつらんと　55
葬したてまつる　108
たなびく（棚引）
たなひきて　110
たのむ（頼）
たのむところ　66
たのみて　26
たゝ　90
だび（荼毘）
荼毗　79
たまふ（給）
下給し　9
さかのほり給へは　12
参たまへり　23
高聲念仏し給　37
きたりたまへる也　39
讃嘆したまふこと　42
現前したまへり　44
すゝめ給　47
おかみたまふへしと　50
とりたまはす　60 64
ちかつき給へるかと　70
みをくり給事　74
来給かと　75
祈願したまひしかは　111
うつりたまひき　112
唱給へしと　120
絶たまひぬ　136
となへたまひ　144
となへ給　147
知見したまへと　157
望給へる故は　159
ため（為）

ため　33 48 73 93 160
為（メ）　153
為（タメ）　155
たもと（袂）
袂（タモト）　111
たゆ（絶）
絶（タヘ）たまひぬ　135
たり《助動詞》
参（マイリ）たれは　98
たんくう（湛空）
湛空（タンクウ）　113
たんじやう（誕生）→ごたん
じやう
誕生（タンシヤウ）　108

ち

ち（地）
地（チ）　14
ちういん（中陰）
中陰（チウイン）　84
ちうじゆん（中旬）
中旬　145
ぢうしんばう（住真坊）
住真坊（チウシン）　113
ちかづく（近）
ちかつき給へる　70
ちけんす（知見）
知見したまへ　157

つ

つき（月）
月　79
つく（付）
付（ツケ）て　59
つぐ（告）
告（ツケ）て　28
つけて
告（ツケテ）　38
つくす（盡）
不可盡（ツクシ）　149
つくる（作）
つくる　153
づだ（頭陀）
頭陀（ツタ）　161
つとむ（勤）
つとめけり　29
つね（恒）
恒（ツネ）　165
つね
つひに（遂）　56 61 139
つゐに　63
づほくめんさい（頭北面西）
頭北面西（ツホクメンサイ）にして　133
つもる（積）
つもりて　54
つらなる（連）
つらなれり　70
づゑ（圖繪）
圖繪（ツエ）　66

て

て（手）→おむて
て《助詞》→もちて
やめて烏頭變（ウトウヘンモウ）毛の宣旨（センシ）を
かうふれり　3
あたりて人〳〵本望（ホンハウ）やす
まりぬ　18
のりて管絃（クワンゲン）遊戯（ユケ）す
夢（ユメ）さめて聞（トウ）に　20
そらに期（コ）して蒙（モウ）昧（ムマイ）身にい
たれり（ツケ）　22
告てのたまはく　25
天竺（テンチク）にありて聲聞（シヤウモン）にま
しわりて頭陀（ツタ）を行き　28
天竺（テンチク）にありて聲聞（シヤウモン）にま
しわりて頭陀（ツタ）を行き　29
来（キタリ）て天台宗（テンタイシユ）を學（カク）て又念仏
をすゝむ　30
来（キタリ）て天台宗（テンタイシユ）を學（カク）て又念仏
をすゝむ　30
おきゐて高聲（カウシヤウ）念仏し
つけてのたまはく　36
といひて念佛の功德（クトク）を讃（サン）
嘆（タン）したまふ　38
きゝていよ〳〵　41
むかへたてまつりて云　46
さしてのたまはく　49
かたりて云　51
功（コウ）つもりて極樂の莊嚴（シヤウコン）　53
付（ツケ）てすゝむれは　54
我みにをきては　59
云てつゐにこれをとりた
まはす　62
なかくたなひきて又圓形（エンキヤウ）　63
の雲（クモ）もあり　66
きゝてのたまはく　71
めをひらきて西方へみを
くり給　74
問（トイ）て云　75
答（コタヘ）てのたまはく　76

まかせて遺骨をおさめ 84
「ゴラシ」凝て十重戒をうく 88
たのみて敬て諷誦を此 90
たのみて敬て諷誦を此 90
砌に修す 90
砌に修す 90
さして云 102
聞て身の毛竪てあせをな 104
かしてさめぬ 104
聞て身の毛竪てあせをな 104
かしてさめぬ 104
聞て身の毛竪てあせをな 104
かしてさめぬ 105
「セメテ」責無間なり 124
到て念仏の聲やうやくか 130
すかにて 130
袈裟をかけて頭北面西に 133
して 133
誦して念佛のいき絶たま 135
ひぬ 135
止てのち 136
没して貴賤哀慟して 140
没して貴賤哀慟して 140
告云 149
くつかへされて悔悲て 149
みつから焼すてゝ歸伏し 163
ぬ 163
くつかへされて悔悲て 163
みつから焼すてゝ歸伏し 163
ぬ 163
くつかへされて悔悲て 163
みつから焼すてゝ歸伏し 164
ぬ 164
かなしみて没後の導師を 165
つとめけり 165
ていこくす（啼哭）
憂悲啼哭しなから 142
てうてう（重々）
重〻の 162
でし（弟子）
弟子 27 45 47 58 69 87 113 125 141
弟子 37
てんがい（天蓋）
天蓋 21
てんだいしう（天台宗）
天台宗 30
てんぢく（天竺）
天竺 28
てんどう（天童）
天童 20
てんわう（天皇）→じゆんと
くてんわう・たいじやうて
んわう
でんゑ（傳繪）→ほふねんし
やうにんでんゑ
と
と（戸）→おむと
と《助詞》
御沙汰として 7
三千餘人と云ゝ 14
しむといゑとも 14
引導せむと思 35
思と云ゝ 35
往生せすと云 41
なしといひて 41
にやいなやと 45
をかみたてまつらすと云ゝ 46
念仏せよとすゝめ給 47
おかみたまふへしと 50
おかむやと 53
しかるへからすと云て 63
「アイタイ」優徳として 65
ちかつき給へるかと 71
ためなりと 73
来給かと 76
しかなりと云ゝ 76
ことなりといへとも 79
小善根と「キラウ」嫌 91
大因縁とならん 91
ひらくかとおほゆ 99
八幡宮（去濁）也とおもへ
は 101
御躰よといふ 103
八幡大菩薩と号したてま
つる 108
みたてまつらんと祈願し 111
唱給へしと云ゝ 120
をよふといゑとも 126
讃嘆せすと云事 129
度〻云ゝ 155
知見したまへと云ゝ 157
とう（等）→ら
觀音勢至等 44
佛菩薩等 55
御正躰等 99
とが（罪）
とか 164

とき（時）→うまのとき・たつのとき・ひつじのとき・みのとき　18 20 77 107 109 119 132 162
時　100
ときどき（時々）
時〳〵　131
ときに（于時）
于時　50 137
とくど（得度）
得度　89
ところ（所）
所　25 98
ところ　26 34 58 101
とし（歳）
とし　146
としごろ（年来）→ねんらい
年來　56
とて《助詞》
よろこはしきかなとて　27
どど（度々）
度〻　155
とどまる（止）
止て　136
となふ（唱）
唱れは　40
唱へ給へし　120
となへたまひ　144
となう　144 147
となへ給　147
とふ（問）
聞に　22
問て　75
ともしび（燈）
燈　79
とり（鳥）
とり　117
とりのこく（酉尅）
酉尅　123
とる（取）
とりたまはす　60 64
とんてう（遁朝）
遁朝　88

な

なか（中）
中　150
ながし（長）
なかくたなひきて　65
ながす（流）
なかす　37
なかして　105
ながら《助詞》
憂悲啼哭しながら　142
なし（無）
苦痛なく　31
云事なし　41
「キフウ」嫌事なかれ　129
なす（成）
成　91
なほ（猶）
なを　136 164
なみ（浪）
浪　153
なみだ（涙）
涙　11
なむかい（南海）
南海　37
なむによ（男女）
男女　11
なり《助動詞》
慈圓慈鎮和尚也　12
さかりなる市　6
不思議なりし事也　16
不思議なりし事也　23
不退也　23
分明也　6
ため也　16
ところなれは　148
きたりたまへる也　148
こと也　146
ところなり　145
儀式なり　138
五色鮮潔なり　137
あはれなるかな　127
ためなりと　124
しかなりと　105
ことなりと　101
八幡宮（王濁）也と　79
奇特なり　76
無間なり　73
勇猛にして　71
計也　68
柔軟にして　62
五日也　58
五日なり　56
八十なり　39
八旬也　34
一心不乱念する　33
第一なり　32

不決定（ナラ） 152
決定（ナリ） 152 152
大勢至菩薩（ナリ） 155 155
度々（トナリト）
なる（成）
大因縁（インエン）とならん 92
に
に《助詞》→かるがゆゑに・ここに・ことに・そらに・つゑに・ゆゑに
鳳城（ホウジャウ）に還歸（ケンキ）あるへきよし 4
禪房（センバウ）に居（スヘ）たてまつらる 7
めむ〳〵（クヤウ）に供養をのへたてまつる 12
一日夜のうちに三千餘（ヨ）人 13
この時にあたりて 18
夢（ユメニ）にみらく 19
雲（クモ）にのりて 20
聞（トウ）に上人内裏（クイリ）へ參（マイリ）たまへり 22
身にいたれり 25
弟子に告（ツケ）て 27
天竺（テンチク）にありて 28
聲（シャウモン）聞僧にましわりて 29
日本國に來（キタリ）て 30
身心に苦痛（クラウ）なく 31
弟子（テシ）等につけて 38
おかみたてまつるにや 45
臨終のために三尺（シャク）の弥陀の像（ザウ）を 48
右（ミギリ）にむかへたてまつり 49
外（ホカ）に又 52
沒後（モッコ）にのそめり 57
御手（テ）に五色の糸（イト）を 59
我みにをきては 62
坊の上に垂布（スイフ）せり 65
處〻（ショ〻）にこれをみる 68
このうゑに紫雲（シウン） 69
末（ヒッシノ）時にことにめをひらきて 73
圓寂（エンジャク）の月にすゝめる 79
感應（カンオウ）の日にしりそく（ソ） 80
風俗（フウゾク）（入濁）にまかせて 84
うく故に得度（トクト）を 89
彼岸（ヒカン）（去濁）にたのみて 89
此砌（コノミギリ）に修（シュ）す 90
かさらむかために早（ハヤク） 93
夢（ユメ）にみらく 97
所（トコロ）に參（マイリ）たれは 98
そのうちにおはしますと 99
きに
そのうちにおはしますと 100
きに
うへに阿弥陀如来うつり 111
たまひき
夢（ユメ）にみる様（ヤウ） 118
巳尅（ミノコク）にいたるまては 123
番〻（ハン〻）に助音（ショイン）す
窮屈（キウクツ）にをよふ 126
最後（サイコ）に望（ノゾム） 132
頭北面西（カウホクメンサイ）にして 133
彼砌（カノミギリ）に葬（サウ）したてまつる 142
夢（ユメ）に上人公胤（コウエン）に告（ツケテ）云（ク） 149
夢に上人公胤（コウエン）に告（ツケテ）云（ク） 149
業（コウ）の中に一日六時（ニチロクジ） 150
業の中に一日六時（ニチロクジ） 150
為孝養（メニ ノ ツ カウヤウ） 153
臨終先迎接（リンジウセンカウセン） 154
為化故（タメノケセンユヘニ） 155
來（キタルコトノカイニ）此界（ハニ） 155
破せむかために浄土決疑（ショウドケツギ） 160
抄三巻（シャウクワン）をつくる
問答（モンダウ）にこと〳〵くくつか
へされて 162
にうなん（柔軟）
柔軟（ニウナン）にして 138
にぐわつ（二月）
二月 96 145
にし（西）
西（ニシ） 116
にしちにち（二七日）
二七日 94
にじふごにち（廿五日）
廿五日 77 123
にじふさむにち（廿三日）
廿三日 121
にじふしにち（廿四日）
廿四日 123
にじふにち（廿日）
廿日 2 64
にて《助詞》
奉行（フギャウ）にて歸京（キギャウ）のよし 17
かすかにて高聲（カウシャウ）は 130
にねん（二年）→けんりやく
にねん
には《助詞》
ところにはあらす 101
にふだう（入道）→おほみや

にふだう・これかたにふだう
にほんこく（日本國）
日本國 30
にん（人）→ごろくにん・さむぜんよにん
にんでんだいゑ（人天大會）
人天大會 9
にんにん（人々）
人々 126

ぬ

ぬ《助動詞》
やすまりぬ 19
さめぬ 105
たまひぬ 136
歸伏しぬ 164

ね

ねむず（念）
念する功驗 150
ねむぶつ（念仏）→かうしや
念仏 31 47 54 72 130
念佛 41 135
ねむぶつしゆじやう（念仏衆生）
念佛衆生 134
ねん（年）→じふよねん
ねんらい（年来）→としごろ
年来 132

の

の《助詞》→うまのとき・かねたかのあそん・すはうのかみ・たつのとき・ひつじのとき・みつちかのきやう・みなもとのあそんもりちか・みのとき・やまひのゆか
逆（入濁）鱗のいましめ 2
烏頭變毛の宣旨 3
隱居の後 4
吉水の前 大僧正の御沙汰 6
吉水の前 大僧正の御沙汰 6
吉水の前 大僧正の御沙汰 6
大谷の禪房 7
忉利の雲 9
南海の浪 11
一日夜のうち 13
幽閑の地 14
市のことし 16
歸京のよし 17
參内の時 20
結縁のため 33
十一日の辰の時 36
阿弥陀佛のきたりたまへる 39
佛の名号 40
念佛の功德 41
昔のことし 42
觀音勢至等の菩薩 44
臨終のために 48
三尺の弥陀の像 48
三尺の弥陀の像 48
病床の右 49
此佛の外 52
念仏功 54
極樂の莊嚴 54
佛菩薩等の身 55
恒のこと 56
佛の御手 58
五色の糸 59
かくのことときの事 61
かくのことときの事 61
つねの人の儀式 61
つねの人の儀式 61
坊の上 65
圓形の雲 66
圖繪の形像の圓光のこと 67
圖繪の形像の圓光のこと 67
圖繪の形像の圓光のこ 67
とく 68
路次往反の人 70
往生のちかつき給へる 75
看病の人 75
佛の来給 75
午の正中 77
圓寂の月 78
荼毗の燈 79
弥陀感應の日 80
利生の風 81
垂迹の勝地 82

方便の善巧　82
かくのことし　83
世間の風俗（入濁）　83
中陰の孝行　85
大臣家の諷誦の文　86
大臣家の諷誦の文　87
存生のむかし　87
遁朝のゆふへ　88
一心精進の誠　88
蓮臺の妙業　92
覺鐘の蓮韻　93
前周防守　94
惟方入道の娘　96
粟田口の禪尼　97
殯葬の所　98
八幡宮の御戸　98
上人の葬送のところ　100
上人の葬送のところ　101
かたわらの人　102
法然上人の御房の御躰　103
法然上人の御房の御躰　103
身の毛　104
御誕生の時　107
八の幡　107
いまの上人　108
誕生の時　108
ふたつのはた　109
大菩薩の御本地　109
袂のうへ　111
道のしるへ　116
とりのあと　117
七八年の初當　118
御臨終の時　119
光明遍照の四句の文　120
光明遍照の四句の文　122
不退のうゑ　123
廿五日の巳尅　125
助音の人々　127
病悩の身　130
念仏の聲　132
所持の慈（去濁）覺大師の　132
九條の袈裟　133
所持の慈（去濁）覺大師の　133
九條の袈裟　133
所持の慈（去濁）覺大師の　135
九條の袈裟　135
攝取不捨の文　135
念佛のいき　135
つねのことし　139
二月中旬の五日　145
正月下旬の五日　146
その夜の夢　149
往生の業の中　149
往生の業の中　150
六時稱名　151
為孝養　153
本地身　154
衆生為化故　155
一心の怨志　156
所造の選擇集　160
面謁の時　162
重々の問答　162
没後の導師　165

のぞむ（望）

望時　132
望給へる　159

のぞむ（臨）

のそめり　57

のたまはく（宣）

のたまはく 28 38 43 51 60 71 76

のち（後）→そののち

後　4
しかうしてのち　83
のち　136

のぶ（述）

のへたてまつる　13

のる（乘）

のりて　20

は

は《助詞》→には

往生は一切衆生結縁のため也　32
かくのことき事はこれつねの人の儀式なり　61
我みにをきてはいまかならすしもしかるへからす　62
往生は一切衆生をして念仏を信せしめむかためなり　72
これは上人の葬送のところにはあらす　100
あとはありけり　117
御臨終の時は光明遍照の四句の文を唱へ給へし　119
いたるまては高聲念仏躰を責無間なり　124
人々は窮屈にをよふとい

ゑとも 126
高聲（カウシヤウ）は時〳〵あひましは る 131
寂後（サイコ）に望（ノゾム）時は年来所持（ネンライショチ）の
慈（シ）（去濁）覺（カク）大師の九條（テウ）の袈裟（ケサ）をかけて 132
かれは二月中旬の五日也 145
これは正月下旬（シユン）の五日なり 145
稱名者往生（ハ）必（カナラス）決定（ナリ） 151
雑善不決定（ハ）（ナラ）ー 152
専修決定（ハ）（ナリ） 152
身大勢至菩薩（ハ）（ノヅミ）（ナリ） 154
望（ノゾミ）給へる故（ユヘ）は上人所造（サウ）の
選擇（センヂヤク）集を破せむかために 159

ば《助詞》

さかのぼり給へは 12
ところなれは 34
唱（トナウ）れは 40
すゝむれは（スヽ） 59
伏惟（フシ）（マヘミレ）は 78
夫以（ソレヲモンミレハ） 87
参（マイリ）たれは 98
おもへは 102
祈願（キクワン）したまひしかは 111
ばう（坊）→ぐぶつばう・しんれんばう・ぢうしんばう 65
坊
ばう（房）→ごばう・ぜんばう
はうべん（方便）
方便 82
ばかり（計）
計（ハカリ） 137
はす（破）
破せむかために
はた（幡） 160
幡
はた
はちじふ（八十）
八十 78 138 148
はちじふよじ（八十餘字）
八十餘（ヨ）字 114
はちじゆん（八旬）
八旬 146 148
はちまんぐう（八幡宮）
八幡宮（マンクウ）（マンクク） 98
八幡宮（マンクク）（去濁）
はちまんだいぼさつ（八幡大菩薩） 101
八幡大菩薩
はやし（早）
早（ハヤク）鳧鐘（フシユ）の蓮韻（レンクイ）を叩（タヽク） 93
はるあき（春秋）
春（シユンシウ）秋（ハルアキ） 137
はんじ（半時）
半時（ハンシ） 122
ばんばん（番々）
番〻（ハンく）に 125
ひ
ひ（日）
日 80
ひがん（彼岸）
彼岸（ヒカン）（去濁） 89
ひつじのとき（未時）
未（ヒツジノ）時 73
ひと（人）
人 35 61 68 75 102 158
ひと 37
ひとつき（一月）
一月 79
ひとびと（人々）
人〳〵 18
ひとり（一人）
一人 40
びやうしやう（病床）
病床（ヒヤウシヤウ）（ヤマイノユカ） 49
びやうなう（病悩）
病悩（ヒヤウナウ） 127
ひらく（開）
ひらきて 74
ひらくか
ひんさう（殯葬）
殯葬（ヒムサウ） 97
ふ
ふう（風）
風（カセ） 98
ふうぞく（風俗）
風俗（フウゾク）（入濁） 81
ぶぎやう（奉行）
奉行（フキヤウ） 84
ふげんぼさつ（普賢菩薩）
普賢菩薩（フケン） 17
ふしぎ（不思議）
不思議（フシキ） 94
ふしゆ（鳧鐘）
鳧鐘（フシユ） 23

ふじゆ（諷誦）
諷誦　87
諷誦　90
ふしよう（鳧鐘）→ふしゆ
ふす（伏）
伏惟（フシ　ヲモンミレ）は　78
ふたい（不退）
不退（フタイ）　27
ふたつ（二）
ふたつ　109
ぶつ（佛）→ほとけ
佛菩薩等　55
ぶつじ（佛事）
佛事　158
ふどうそん（不動尊）
不動尊（フトウソン）　86
ふらん（不乱）→いちしむふらん
ふる（降）
ふりき　107
ふれり　109
ふんみやう（分明）
分明（フンミヤウ）　32

へ
へ《助詞》
内裏（タイリ）へ参（マイリ）たまへり　22
西方（ニシ）へみをくり給　74
西へよしゆくへき道　116
べし《助動詞》
あるへきよし　5
かへりゆくへし　34
高聲（カウシヤウ）念仏すへし　39
おかみたまふへしと　50
しかるへからす　63
ゆくへき道　116
唱（トナヘ）給へしと　120
不可盡　153
べつたう（別當）
別當（ベツタウ）　93
へん（返）→ごろくへん・じふよへん　96
へんぜう（遍照）→くわうみやうへんぜう

ほ
ほうじやう（鳳城）
鳳城（ホウシヤウ）　4
ほか（外）
外（ホカ）　52
ぼさつ（菩薩）→だいせいし・ぼさつ・ふげんぼさつ
菩薩　44
ほとけ（佛）→ぶつ
佛　40 50 52 52 58 75
ほふしん（法身）
法身　140
ほふねんしやうにん（法然上人）
法然上人　103
ほふねんしやうにんでんゑ（法然聖人傳繪）
法然聖人傳繪　1
ほんぢ（本地）→ごほんぢ
本地（ホンチ）　154
ほんばう（本望）
本望（ホンバウ）　18

ま
まうさく（申）
申さく　69
まかす（任）
まかせて　84
まき（巻）→くわんだいはち
まこと（誠）
誠（マコト）　88
まことに（誠）
まことに　26
まさしく（正）
まさしく　131
まさに（正）
まさに　69
まじはる（交）
ましわりて　29
また（又）
又　31 52 58 66 105
また　43 140
まつ（待）
まつ所（トコロ）　25
まづ（先）
先（ヅ）　154
まで《助詞》
いたるまては　124
まなぶ（學）
學（カク）て　30
まゐる（參）
參事　15
參（マイリ）たまへり　23

参たれは 98
まん（満）
満八十 78 138

み

み（巳）→みのこく・みのとき
み（身）→わがみ
身 25 55 104 127 154
みおくる（見送）
みをくり給 74
みぎり（右）
右 49
みぎり（砌）
砌 90 142
みだ（弥陀）
弥陀 48 80
みち（道）
道 116 163
みづから（自）
みつから
みつちかのきやう（光親卿）
光親卿 16
みづのえさる（壬申）
壬申 24 77
みな（皆）
皆 37
みなもとのあそんもりちか
（源朝臣盛親）
源朝臣盛親 94
みのこく（巳尅）
巳尅 123
みのとき（巳時）
巳時 64
みやうがう（名号）
名号 40
みらく（見）
みらく 19 97
みる（見）
見たてまつること 55
みる 68
みたてまつらんと 110
みる様 119
みろく（弥勒）
弥勒 112

む

む《助動詞》
引導せむと 35
信せしめむかため 73
大因縁とならん 92
かさらむかため 92 110
みたてまつらんと 154
先迎接 155
為化 160
破せむかためにむかし（昔）
昔 9 42 117 87
むかし
むかふ（迎）
むかへたてまつりて 49
むげん（無間）
無間 124
むすめ（娘）
娘 96
むまい（蒙昧）
蒙昧 25
蒙昧 31

め

め（眼）
めうごふ（妙業）
妙業 92
めつ（滅）
滅 144 144 147 147
めんえつ（面謁）
面謁 162
めんめん（面々）
めむ〳〵に 12

も

も《助詞》
一人も往生せす 40
雲もあり 66
むかしもとりの 117
弟子等も憂悲啼哭し 141
釋尊も滅をとなへ給 147
かれも八十なり 148
これも八旬也 148
もうまい（蒙昧）→むまい
蒙昧 25
もちて（以）
もちて 51 114
もつご（没後）
没後 57 165
もつす（没）
没して 140

もと（元）
もと　28 33
もはら（最）
最　151
もりちか（盛親）→みなもと
のあそんもりちか
もん（文）
文　87 120 135
もんだふ（問答）
問答　162
もんてい（門弟）
門弟　83

や
や（夜）→いちにちや
や《助詞》→をや
おかみたてまつるにやい
なやと　45
おかみたてまつるにやい
なやと　45
おかむやと　52
やう（様）
様　119
やうやく（漸）
やうやく　130
やきすつ（焼捨）
焼すてゝ　163
やすまる（安）
やすまりぬ　19
やつ（八）
八　107
やまひのゆか（病床）
病床　49
やむ（止）
やめて　3

ゆ
ゆか（床）→やまひのゆか
ゆく（行）→かへりゆく
ゆくへき道　116
ゆげす（遊戯）
管絃遊戯す　21
ゆび（指）
ゆひ　51
ゆふべ（夕）
ゆふへ　88
ゆみやう（勇猛）
勇猛にして　127
ゆめ（夢）
夢　19 22 97 105 118 149
ゆゑ（故）
故　89
故に　155 159
ゆゑに（故）→かるがゆゑに
故に　107

よ
よ（夜）
夜　96 149
よ（餘）→さむぜんよにん・
じふよねん・じふよへん・
はちじふよじ
よ《助詞》
御躰よと　103
ようめう（容兒）
容兒　139
よく（善・能）
善　152
能　153
よし（由）
よし　5 17
よし（縦）
よしゆくへき道　116
よしみづ（吉水）
吉水　6
より《助詞》
雲より下給し　9
正月一日より老病そら
に期して　24
十餘年よりこのかた
廿四日酉剋より廿五日の
巳剋に　54
よりて（仍）
仍　123
よる（夜）→よ
よろこばし（喜）
よろこはしきかな　26
よろこぶ（喜）
よろこひおかみ　10

ら
ら（等）→とう
弟子等　38
弟子等
門弟等　45 48 58 141
らうせう（老少）
老少　83
らうたい（老躰）
老躰　129
らうびやう（老病）　126

老病（ラウビヤウ） 24
らく《助詞》
みらく 19 97

り

り《助動詞》
かうふれり 4
参（マイリ）たまへり 23
いたれり 25
きたりたまへる也 39
現前（ケンセン）したまへり 44
のそめり 57
垂布（スイフ）せり 65
つらなれり 70
ちかつき給へるかと 70
すゝめる一月 79
ふれり 109
参集（サンシユ）せる道俗（タウゾク） 128
見聞（ケンモン）せる老少 128
喪（サウ）せるかことし 141
望（ノゾミ）給へる故は（ユヘ） 159
りしやう（利生）
利生（リシヤウ） 81
りむじゆう（臨終）→ごりむじゆう 68

ろ

ろくじ（六時）
六時（ロクジ） 150 151
ろくじふろく（六十六）
六十六 138
ろじ（路次）
路次（ロシ） 139

ゐ

ゐとう（恵燈）
恵燈（エトウ） 46
ゐんぎやう（圓形）
圓形（エンキヤウ） 66
ゐんくわう（圓光）
圓光（エンクワウ） 67
ゐんじやく（圓寂）
圓寂（エンジヤク） 78

を

を《助詞》
いましめをやめて 3
宣旨（センシ）をかうふれり 3
院宣（インセン）を下（クタ）さる 6
下（クタ）給しを 9
浪（ナミ）をさかのぼり給へは 11
供養（クヤウ）をのへたてまつる 12
地（チ）をしむ 14
天蓋（テンガイ）をさしおほい 21
頭陀（ヅタ）を行（カウ）き 29
天台宗（テンダイシユ）を學て 30
念仏をすゝむ 31
人を引導（インダウ）せむ 35
涙をなかす 37
名号（ミヤウガウ）を唱（トナ）れは 40
功徳（クドク）を讃嘆（サンタン）したまふ 41
これをきゝて
像（ザウ）を病床（ヤマイノユカ）の右（ミギ）にむかへ 46

臨終
りようがん（龍顔）
龍顔（レウガン） 2

る

る《助動詞》
下（クタ）さる 6
居（スヘ）たてまつらる 8
仰（アオ）出（イダ）され侍けり 17
くつかへされて 163

れ

れんだい（蓮臺）
蓮臺（レンダイ） 92
れんゐん（蓮韻）
蓮韻（レンイン） 93

ゐ

ゐこつ（遺骨）
遺骨（イコツ） 84
ゐる（居）→おきゐる
ゐんせん（院宣）
院宣（インセン） 5

わ

わうじやう（往生）
往生（ワウジヤウ） 32 40 70 72 149 151
わうへん（往反）
往反（ワウヘン） 68
わが（我）
我（ワガ） 32
わか 72
わがみ（我身）
我身（ワガミ） 62
われ（我）
我（ワレ） 28 33

たてまつりて　48
ゆひをもちて　51
そらをさして　51
身を見たてまつること　55
これをいはす　57
糸を付て　59
これをとりたまはす　60 64
これをみる　68
一切衆生をして　72
念仏を信せしめむ　72
めをひらきて　74
遺骨をおさめ　84
孝行をいたす　85
不動尊を供養す　86
誠を凝て　88
十重戒をうく　89
得度を彼岸（去濁）にたのみて　89
諷誦を此砌に修す　90
妙業をかさらむ　92
蓮韻を叩　93
御戸をひらく　98
御正躰をさして　102
これを聞て　104

あせをなかして　104
御本地を行教和尚みたて　110
まつらんと　113
誦經物をさゝく　114
一紙をもちて　120
文を唱給へし　124
躰を責　133
袈裟をかけて　135
文を誦して　137
舌を動　141
考妃を喪せる　144 147
滅をとなへ　144 147
滅をとなう　153
成善　155
衆生為化　158
諷誦を捧　159
唱導を望給へる　160
選擇集を破せむ　161
浄土決疑抄三巻をつくる　164
そのとかをかなしみて　165
導師をつとめけり
をがむ（拝）
おかみたてまつりし　10
おかみたてまつる　45

をかみたてまつらす　45
おかみたまふへし　50
おかむや　52
をさむ（収）
おさめ　84
をや《助詞》
をなしきをや　81

漢字索引凡例

一、この索引は、東京国立博物館蔵『法然上人傳繪』に用いられているすべての漢字を、翻字本文にもとづいて、収載したものである。

一、各項の記載形式は、当該漢字・本文の用例・用例の所在行数、とした。

一、排列は、『康熙字典』に基づき、部首順・画数順とした。

一、その他は、語彙索引に準じた。

〔一〕十一月 2
一日夜 13
一日 24 150
一切衆生 33 72
十一日 36
一人 40
一月 79
一心 88 156
一紙 114
一時 121
一心不乱 150
第一 151
一部 156
〔七〕初七日 85
二七日 94
三七日 112
七八年 118
〔下〕下さる 6
下給し 9
下旬 146
〔三〕三千餘人 14
三尺 48
三日 96
〔中〕権(去濁)中納言 16
正中 78
1 一部
十方世界 134
〔世〕世間 83
不可盡 153
不決定 152
一心不乱 150
攝取不捨 135
不動尊 86
不退 27 122
〔不〕不思議 23
法然上人 103
上 65
上人 71 97 100 108 119 121 144 147 149 159 161
11 19 22 36 43 50 60
〔上〕太上天皇 5
三巻 161
三寶 157
三日三夜 121
三日三夜 121
廿三日 121
三七日 112
中陰 84
中旬 145
中 150
〔九〕九條 133
1 乙部
〔也〕也 6 23 27 32 33 39 56 101
137 145 148
〔乱〕一心不乱 150
1 丁部
〔事〕事 15 23 41 61 74 91 129 137
佛事 158
〔二〕建暦二年 24 77 95
二七日 94
二月 96 145
十二行 114
〔于〕于時 50 137
〔云〕云ゝ 14 35 46 76 95 120 155
157
云(イフ体) 41 129
云(イハク) 49 53 75 87 103
云て 63
2 二部
〔京〕↓京 17
〔京〕歸京 17
2 一部
〔奇〕↓奇
2 人部
〔人〕法然聖人傳繪 1
人天大會 9
上人 71 97 100 108 119 121 144 147 149 159 161
11 19 22 36 43 50 60
三千餘人 14
人〈 18
五人 20
人 35 61 68 75 102 158
一人 40
法然上人 103
〔五〕云ク 149
五人 20
五色 59 67
五六返 75
廿五日 77 123
五六人 125
五日 145 146

五六人 125
人々 126
〔仍〕 6 92
〔仏〕 ↓佛
〔以〕 夫以 87
以後 121
〔付〕 付て 59
〔仰〕 仰出され 17
〔伏〕 惟は 78
〔佛〕 歸伏しぬ 164
高聲念仏 27 37 38 122
念仏 31 47 54 72 130
阿弥陀佛 39
佛 40 50 52 52 55 58 75
念佛求佛坊 41 95 135
高聲念仏 124
高聲念佛 127
念佛衆生 134
佛事 158
〔住〕 住真坊 113
〔供〕 供養 12 86
〔侍〕 侍けり 17
〔來〕 ↓来
〔信〕 信せしめむ 72
信蓮坊 85
〔俗〕 道俗 12
風俗（入濁） 84
道俗 128
〔便〕 方便 82
〔修〕 修す 90
専修 152
〔傳〕 法然聖人傳繪 1
〔僧〕 大僧正 6
聲聞僧 29
僧正 159
〔像〕 像 48
形像 67
儀式 62
〔儀〕
2 儿部
〔元〕 建暦元年 2
神（去濁）宮皇后元年 106
〔光〕 光親卿 16
圓光 67
光明遍照 119 134
〔先〕 先師 87
先 154
〔公〕 光親卿 149
公胤 153
〔六〕 五六返 75
五六人 125
六十六 138
六十六時 150 151
〔八〕 巻第八 1
満八十 78 138
八幡宮 98
八幡宮（去濁） 101
八 107
八幡大菩薩 107
八十餘字 114
七八年 118
八旬 146 148
八十 148
公胤 149
公胤 153
〔入〕 大宮入道 86
惟方入道 96
参内 20
内裏 22
〔内〕
2 入部
2 八部
〔兼〕 兼隆朝臣 118
2 冫部
〔凝〕 「コラシ」て 88
2 几部
〔凡〕 凡 53 157
2 凵部
〔出〕 仰出され 17
2 刀部
〔切〕 一切衆生 33 72
〔分〕 分明 32
〔初〕 初七日 85
初當 118
〔別〕 別當 93 96
〔利〕 忉利 9
利生 81
〔到〕 到て 130
〔前〕 前 6 94
現前したまへり 44

十日 81
十重戒 89
十二行 114
八十餘字 114
十方世界 134
十餘遍 137
六十六 138
八十 148
三千餘人 14
午の時 129
午 77
半時 122
南海 11
貴賤高卑 15

〔功〕功徳 41
功験 54
〔助〕助音 125
動尊 86
〔勇〕勇猛 127
〔動〕動 137
〔勒〕弥勒 112
〔勝〕勝地 4
勝尾 82
〔勢〕勢至 82
大勢至菩薩 154

2 力部

〔卑〕

2 卩部

〔南〕

〔半〕

〔午〕

〔千〕

〔卿〕光親卿 17
〔遷〕遷化 78
〔化〕化ッ 155
〔北〕頭北面西 133

2 七部

〔参〕あつまり参事 15
参内 20
参たまへり 23
参たれは 98
参集せる 128

2 ム部

〔十〕十餘季 53
十一日 36
十一月 2
満八十 138

2 十部

〔又〕又 31 52 58 66 105
〔反〕往反 68
〔取〕攝取不捨 135

3 口部

〔口〕粟田口 97
〔叩〕叩 93
〔可〕不可盡一 153
〔句〕四句 120
〔号〕名号 40
号し 108
〔台〕↓臺
天台宗 30
〔右〕右 49
〔吉〕吉水 6
〔后〕神（去渕）宮 皇后元年 106
〔名〕名号 40
稱名 151
〔各〕各〈 44
〔告〕告て 28
告 149
〔周〕周防守 94
〔知〕知見したまへ 157

2 又部

〔和〕慈圓慈鎮和尚 6
行教和尚 110
〔哀〕哀働して 140
〔哭〕啼哭し 142
〔唱〕唱れは 40
唱へ 120
唱導 159
〔問〕問て 75
問答 162
〔善〕善巧 82
小善根 90
雑善 152
善ク 152
善一 153
〔喪〕喪せる 141
〔啼〕啼哭し 142
〔嘆〕讃嘆したまふ 42
讃嘆せす 129
〔嚴〕莊嚴 55

3 口部

〔四〕四句 120
廿四日 123
〔因〕大因縁 91
〔國〕日本國 30

〔圓〕
慈圓慈鎮和尚（エンキャウ） 6
圓形（エンギヤウ） 66
圓光（エンクワウ） 67
圓寂（エンシヤク） 78

〔圖〕
圖繪（ヅエ） 66

3 土部

〔土〕
浄土決疑抄（キショ） 161

〔地〕
地（チ） 14
勝地（ショウチ） 82
御本地（ホンチ） 110
本地（ホンチ） 154

〔坊〕
坊（シレン） 65
信蓮坊（クボウ） 85
求佛坊（チウシン） 95
住真坊（スイフ） 113

〔垂〕
垂布せり（スイシヤク） 65
垂迹（スイシヤク） 82

〔城〕
鳳城（ホウシヤウ） 4

3 士部

〔壬〕
壬申（ミヅノヘサル） 24 77

〔夏〕
夏臈（カラウ） 138

3 夕部

〔外〕
外（ホカ） 52

〔多〕
多（ヲシ） 158

〔夜〕
一日夜 13
夜 96 149

〔夢〕
夢（ユメ） 19 22 97 105 118 149
三日三夜 121

3 大部

〔大〕
大僧正（ラウソウ） 6
大谷（ラウタニ） 7
人天大會（エ） 10
大宮入道 86
大因緣（インエン） 91
大臣家 86
大菩薩 106 109
八幡大菩薩 107
慈（去濁）覺大師（カク） 132
大勢至菩薩 154

〔太〕
太上天皇（テンワウ） 5
太上天皇（テンワウ） 5

〔天〕
太上天皇（シヨウテンワウ） 5
順德天皇（エ） 5
人天大會（テンエ） 9
天童（テンドウ） 20

〔天〕
天蓋（テンカイ）
天竺（テンチク）
天台宗（テンタイシウ） 28 30

〔夫〕
夫（ソレ） 87

〔奇〕
奇特なり（キトク） 105

〔奉〕
奉行（ブキヤウ） 17

3 女部

〔女〕
男女 12

〔如〕
阿弥陀如来（カウヒ） 112

〔妃〕
考妃（メウコウ） 140

〔妙〕
妙業（メウコウ） 92

〔娘〕
娘（ムスメ） 96

〔嫌〕
「嫌（キラウ）」 91

3 子部

〔子〕
弟子 27 45 48 58 69 87 113
弟子（テシ） 125 141

〔字〕
八十餘字（ソンシヤウ） 38

〔存〕
存生（ケウキヤウ） 115

〔孝〕
孝行（ケウキヤウ） 85

〔季〕
季節（キセツ） 143

孝養 153

〔學〕
學て（カクウ） 30

3 宀部

〔守〕
周防守（スワウノカミ） 94

〔宗〕
天台宗（テンタイシウ） 30

〔定〕
決定（ナリ） 152 152
不決定（ナラウンカク） 152

〔客〕
雲客（ウンカク） 118 19

〔宣〕
宣旨（センシ） 3
院宣（インセン） 5

〔家〕
大臣家 86

〔宮〕
大宮入道 86
八幡宮（マンクウ） 98
八幡宮（去濁）神（シン）（去濁）宮皇（クウクワウコウ） 101
后元年 106

〔容〕
容兒（ヨウメ） 139

〔寂〕
圓寂（エンシヤク） 78

〔寐〕
↓最 157

〔寶〕
三寶 157

3 寸部

〔專〕
專修（トウノコウ） 152

〔尅〕
酉尅（ミノコク） 123
巳尅（ミノコク） 123

〔尊〕
釋尊（シヤクソン） 78 9
不動尊（フドウソン） 86

〔導〕釋尊引導せむ 144 147
御導師 85 95
導師 35
唱導 112
導師 159 165

3 小部

〔小〕小善根 90
〔少〕老少 129
〔尚〕慈圓慈鎮和尚行教和尚 6 110

3 尸部

〔尺〕三尺 48
〔尼〕禪尼 97
〔尾〕勝尾 4
〔居〕隱居 4
居たてまつらる 7
居せし 33
〔屈〕窮屈 126

3 山部

〔岸〕彼岸（去濁） 89

3 工部

〔巧〕善巧 82

3 己部

〔巳〕巳時 64
辛巳 106
巳尅 123

〔巻〕巻第八 1
三巻 161

3 巾部

〔市〕市 16
〔布〕垂布せり 65
〔師〕御導師 85 95
先師 87
導師 112
慈（去濁）覺大師 132
導師 165
〔幡〕八幡宮 98
八幡宮（去濁） 101 107
幡
八幡大菩薩 107

3 干部

〔年〕建暦元年 2
建暦二年 24 77 95
十餘年 53
年來 56
行年 78
七八年 118
神（去濁）宮皇后元年 106
年來 132
〔年〕↓年

3 幺部

〔幽〕幽閑（イウ「カン」） 14

3 广部

〔床〕病床 49
〔度〕得度 89
度々 155

3 廴部

〔建〕建暦元年 2
建暦二年 24 77 95

3 廾部

〔廿〕廿日 2
廿五日 64 77 123
廿三日 121
廿四日 123

3 弋部

〔式〕儀式 62

3 弓部

〔引〕引導せむ 35
〔弟〕弟子 27 45 47 58 69 87 113
弟子 125 141
門弟 37

3 彡部

〔弥〕阿弥陀佛 39
弥陀 48 80
阿弥陀如来 111
弥勒 112

3 彡部

〔形〕圓形 66
形像 67

〔徳〕
順徳天皇 5

〔優〕
優優徳として 64

〔徳〕
優徳として 64
御臨終 119
御本地 110
御誕生 106
御躰 103
御房 103
御正躰 99 102
御戸 98
御導師 85 95
御手 59
御沙汰 7
〔得〕
得度 89
寂後 132
以後 121
没後 57 165
〔後〕
後 4
彼 142
〔彼〕
彼岸（去濁） 89
往反 68
往生せす 40
〔往〕
往生 32 70 72 149 151

3 イ部

〔悲〕
憂悲 142
〔憂〕
惟方入道 96
〔惟〕
伏惟は 78
病悩 127
〔悩〕
恵燈 139
〔恵〕
恒恒 56
〔恒〕
悔悔 163
〔悔〕
思思 35
不思議 23
〔思〕
念する 150
念佛衆生 134
高聲念佛 127
高聲念佛 124
念佛 41 135
念仏 31 47 54 72 130
高聲念佛 27 37 38 122
〔念〕
志懇志 156
〔志〕
忉利 9
〔忉〕
必 151
〔必〕
一心不乱 150
一心 88 156
身心 31
〔心〕
功徳 41

4 心部

〔慈〕
慈圓慈鎮和尚 6
慈圓慈鎮和尚 6
慈（去濁）覺大師 132
〔慈〕
哀慟して 140
〔慟〕
憂悲 141
〔憂〕
感應 80
〔感〕
感應 80
悲て 163
〔悲〕
懇志 156
〔懇〕

4 戈部

成 153
〔成〕
我 124
我 127
〔我〕
我み 62
十重戒 89
〔戒〕
或時 27
或は 122
〔或〕
遊戯す 21
〔戯〕

4 戸部

御戸 98
〔戸〕
禪房 7
〔房〕
御房 103

〔所〕
所持 132 160
所造
所持 25 98

4 手部

御手 59
〔手〕
浄土決疑抄 161
〔抄〕
抑 106 118
抑 32
所持 132
〔持〕
捨取不捨 135
〔捨〕
迎接 154
〔接〕
捧 158
〔捧〕
摺本 114
〔摺〕
選擇集 160
〔擇〕
攝取不捨 134
〔攝〕

4 攵部

故に 58
故に 89 107
故に 155
故は 159
〔故〕
行教和尚 110
〔教〕
敬て 90
敬白 94
〔敬〕
烏頭變毛 3
〔變〕

4 文部

〔文〕
文 87 120 135

〔旨〕
宣旨(センシ) 3
五日(ゴニチ) 145 146
廿四日 123

〔旬〕
中旬(チウシュン) 145
下旬(ゲシュン) 146

〔早〕
八旬(ハヤク) 146 148
早(ハヤ)昔(ムカシ) 93

〔昔〕
昔(ムカシ) 9
昔(ムカシ)(フンキウ) 42

〔明〕
分明(フンキウ) 32
光明遍照(クワウミヤウヘンセウ) 119 134

〔春〕
春秋(シュンシウ)(ハルアキ) 137

〔是〕
是(コレ) 56 158

〔昧〕
蒙昧(モウマイ) 25
蒙昧(モウマイ) 32

〔時〕
時(トキ) 18 20 77 107 109 119 132 162
或時(アルトキ) 27
辰(タツ)の時 36
于時(トキニ) 50 137
巳時(ミトキ) 64
未時(ヒツジ) 73
一時(ハンシ) 121
半時(ハンシ) 122
午(ウマ)の時 129

4 日部

〔日〕
廿日 2 64
一日夜 13
一日 24 150
日本國 30
十一日 36
廿五日 77 123
日 80
十日 81
初七日 85
二七日 94
三日 96
三七日 112
廿三日 121
三日三夜 121

4 方部

〔方〕
西方 74
方便(カタ)(ベン) 82
惟方(コレカタ)入道 96
十方世界 134

〔時〕
時(トキ)〈
六時(ロクシ) 131 150 151

〔普〕
普賢菩薩(フケンクワンヤクボサツ) 94

〔暦〕
建暦元年(ケンリヤクグワンネン) 2
建暦二年(ケンリヤクニネン) 151

〔最〕
最後(サイゴ) 132

〔會〕
人天大會(ヒトヤウダイヱ) 10

4 月部

〔月〕
十一月 2
正月 24 77 145
月 79
一月 79
二月 96 145

〔望〕
本望(ホンバウ) 18
望(ノゾミ) 132
望(ノゾ)む 159

〔期〕
期(ゴ)して 25

〔朝〕
遁朝(トンテウ)(ミ) 88
源朝臣(ナモトノアツソン) 94
兼隆(カネタカ)朝臣(アツソン) 118

4 木部

〔本〕
本望(ホンバウ) 18
日本國(ニホンコク) 30
御本地(ゴホンチ) 110
摺本(スリホン) 114
本地(ホンチ) 154

〔未〕
辛未(シンヒツジ) 2
未(ヒツジ)時 73

〔来〕
来(キタリ)て 30
年來(ネンライ) 57
来(キタリ)給 75
阿弥陀如来(アミダニヨライ) 112
年来(ネンライ) 132
來(キタル)コト 155

〔柔〕
柔軟(ニウナン) 138

〔根〕
小善根(セウゼンコン) 91

〔條〕
九條(クデウ) 133

〔極〕
極樂(ゴクラク) 54

〔樂〕
樂(ラク)極樂(ゴクラク) 150

〔業〕
業(ゴウ) 92
妙業(メウゴウ) 133

〔様〕
様(ヤウ) 119

〔權〕
權(ゴン)(去濁)中納言(チウナゴン) 16 54

4 欠部

〔次〕
路次(ロシ) 68

4 止部

〔止〕
止（トヽマリ）て 136
大僧正 6
正月 24 77 145
正中（シャウチウ） 78
御正躰（シャウタイ） 99 102
僧正 159

〔此〕
此（コヽ） 52
還歸（クヱンキ） 90 155
歸京（キキャウ） 5
歸伏（キフク）しぬ 17 164

〔歸〕

4 歹部

〔殯〕
「ヒム」殯葬（サウ） 97

4 比部

〔毗〕
茶毗（タヒ） 79

4 毛部

〔毛〕
烏頭變毛（ウトウヘンモウ） 3
毛（ケ） 104

〔氏〕
義氏（キシ） 114

4 水部

〔水〕
吉水（クヰフツ） 6
求佛坊（クフツボウ） 95

〔求〕
決定（ナリ） 152 152

〔決〕
不決定（ナラ） 152
浄土決疑抄（キショ） 161

〔沙〕
御沙汰（モツコ） 7

〔汰〕
御沒後（モツコ） 7
沒後 57 165
沒（モツ）して 140

〔沓〕
↓法

〔法〕
沓然聖人伝繪 1
法然上人 103
法身（ホツス） 140

〔海〕
説法（セツホウ） 153
南海（ナンカイ） 11

〔浄〕
浄土決疑抄（キショ） 161

〔涙〕
涙（ナミ） 37

〔浪〕
浪（ナミ） 11

〔湛〕
湛空（タンクウ）、（ミ） 113

〔源〕
源（ナモトノ）朝臣（アツソン） 94

源―空 152
源空 154

〔滅〕
滅（メツ） 144 144 147 147

〔滿〕
滿（マン）八十（センケツ） 78 138

〔潔〕
鮮潔なり 68

4 火部

〔為〕
為（タメ）ス 153
為（ウ） 155

〔烏〕
烏頭變毛（ウトウヘンモウ） 3

〔燒〕
燒（ヤキ）すてゝ 163

〔然〕
沓然聖人傳繪 1
法然上人（ホウネンシヤウニン） 103

〔無〕
無間（ムケン）なり 124

〔照〕
光明遍照（コウミヤウヘンセウ） 119 134

〔燈〕
燈（トウ）ヒ 79
惠燈（エトウ） 139

4 牛部

〔物〕
誦經物（シユキヤウモツ） 113

〔特〕
奇特（キトク）なり 105

4 犬部

〔猛〕
勇猛（ユミヤウ） 127

5 玄部

〔妙〕
↓妙

5 玉部

〔現〕
現前（ケンセン）したまへり 44

5 生部

〔生〕
往生 32 70 72 149 151
一切衆生 33 72
往生（ワウシヤウ）せす 40
利生（リシヤウ） 81
存生（ソンシヤウ） 87
御誕生（ゴタンシヤウ） 106
誕生（タンシヤウ） 108
念佛衆生 134
衆生 155

5 田部

〔申〕
壬申（ミヅノヘサル） 24 77 69
申（サル）さく 96

〔田〕
粟田口（アワタクチ） 12

〔男〕
男女 134

〔界〕
十方世界（カイニ） 155
界（カイ）ー

〔盛〕
、(ミ)源朝臣盛親 94

5 皿部

〔皇〕
太上天皇 5
順徳天皇 5
神(去濁)宮皇后元年 106

〔皆〕
皆 37

〔皃〕
容皃 139

〔白〕
敬白 94

5 白部

〔痛〕
苦痛 31

〔病〕
老病 24
病床 49
看病 75
病悩 127

5 疒部

〔疑〕
浄土決疑抄 161

5 疋部

〔當〕
初當 118
別當 93 96

〔番〕
番くに 125

〔盡〕
不可盡一 153

5 目部

〔看〕
看病 75

〔真〕
住真坊 113

〔眼〕
開眼 156

5 石部

〔砌〕
砌 90 142

〔破〕
破せむ 160

5 示部

〔祈〕
祈願 111
したまひ

〔神〕
神(去濁)宮皇后元年 106

〔禪〕
禪房 7
禪尼 97

5 禾部

〔季〕
↓年

〔秋〕
春秋 137

〔稱〕
稱名 151

5 穴部

〔空〕
湛空 113
源一空 153

〔窮〕
源空 154
窮屈 126

5 立部

〔童〕
天童 20

〔竪〕
竪て 104

6 竹部

〔竺〕
天竺 28

〔第〕
巻第八 1
第一 151

〔等〕
等 38
等 44 45 48 55 58 83 99 141

〔答〕
答へて 76
問答 162

〔節〕
季節 143

〔管〕
管絃 20

〔粟〕
粟田口 96

6 米部

〔精〕
精進 88

6 糸部

〔糸〕
糸 59

〔紙〕
一紙 114

〔納〕
権(去濁)中納言 16

〔絃〕
管絃 21

〔紫〕
紫雲 64 69

〔終〕
臨終 48 154
御臨終 119

〔給〕
給し 9
給へは 12
給(タマフ) 37
給(タマフ体) 47 74 75
給へる 70 159
給へし 120
給(タマヒ) 147

〔結〕
結縁 33
絶たまひぬ

〔絶〕
絶たまひぬ 135

〔経〕
誦経物 113

〔縁〕
結縁 33
大因縁 91

〔繪〕
浩然聖人傳繪 1
圖繪 66

〔義〕
義氏 113

6 羊部

6 老部

〔考〕
考妃 140

〔老〕
老病（ラウヒヤウ） 24
老躰（ラウタイ） 126 129
〔者〕
老少（ハ） 151
者 6 耳部
〔聖〕
浙然聖人傳繪 1
聖衆（トウ） 44
〔聞〕
聞に（シヤウモン） 22
聲聞僧（キ） 29
聞て（ケンモン） 104
見聞せる（カウシヤウ） 128
〔聲〕
高聲念仏 122
聲聞僧（シヤウモン） 29
高聲念仏 124
高聲念佛（コエ） 127
聲（カウシヤウ） 130 136
高聲 131
6 肉部
〔胤〕
公胤（コウエン） 149
〔能〕
公胤（ク） 153
能（カラウ）
夏臈 138
〔臣〕
大臣家（ミ）、源（ナモトノアツソンモリチカ）朝臣盛親 86 94
兼隆（カネタカノアツソン）朝臣 118
6 臣部
〔臨〕
臨終 48 154
御臨終 119
6 至部
〔至〕
勢至 43 82
大勢至菩薩 154
〔臺〕
↓台（レンタイ）
蓮臺 92
6 舌部
〔舌〕
舌（シタ） 137
6 色部
〔色〕
五色（シキ） 59 67
6 艸部
〔苦〕
苦痛（クラウ）（シヤウコン） 31
〔莊〕
莊嚴（タヒ） 55
〔荼〕
荼毗 79
〔菩〕
菩薩 44 55
〔葬〕
普賢菩薩（フケン） 95
大菩薩 106 109
八幡大菩薩 107
大勢至菩薩 154
殯葬（ヒムサウ） 97
葬送（サウソウ） 100
葬し（サウシ） 142
〔蓋〕
天蓋（テンカイ） 21
〔蒙〕
蒙昧（モウムマイ） 25
蒙昧（モウムマイ） 31
〔蓮〕
信蓮坊（シンレンボウ） 85
蓮臺（レンタイ） 92
蓮韻（レンイン） 93
〔薩〕
菩薩（ボサツ） 44 55
普賢菩薩（フケン） 95
大菩薩 106 109
八幡大菩薩 107
大勢至菩薩 155
6 虍部
〔處〕
處々（ショくく） 68
6 血部
〔衆〕
一切衆生 33 72
聖衆 95
念佛衆生 106 109
衆生 134 44
6 行部
〔行〕
奉行（フキヤウ） 17
行き（キヤウネン） 29
行年（ケウキヤウ） 78
孝行（キヤウケウクワウシヤウ） 85
行教和尚 110
十二行（カウ） 114
6 衣部
〔袂〕
袂（タモト） 111
〔袈〕
袈裟（ケサ） 133
〔裏〕
内裏（クイリ） 22
〔裟〕
袈裟（ケサ） 133
6 西部
〔西〕
西方（ニシ） 74
西北面西（ホクメンサイ）頭（ツ） 116 133
7 見部
〔見〕
見たてまつる 55

見聞せる　128
〔親〕知見したまへ　157
光親卿、源朝臣盛親　16　94
〔覺〕慈（去濁）覺大師　132
〔觀〕觀音　43　82

7　言部

〔言〕權（去濁）中納言　16
〔計〕計　137
〔誠〕誠　88
〔誦〕諷誦經物　87　90　113
諷誦して　135
〔說〕說法　153
〔謁〕面謁　162
〔誕〕御誕生　106
誕生　108
〔諷〕諷誦　87　90　158
諷誦　158
〔議〕不思議　23
〔讚〕讚嘆したまふ　42
讚嘆せす　129

7　谷部

〔谷〕大谷　7

7　貝部

〔貴〕「セメテ」貴　124
〔貴〕貴賤高卑　15　140
〔賤〕貴賤高卑　15　140
〔賢〕普賢菩薩　94

7　足部

〔路〕路次　68
〔身〕身　25　55　104　127　154
身心　31
法身　138
〔躰〕御正躰　99　102
御躰　103
老躰　124
身躰　126　138

7　身部

7　車部

〔軟〕柔軟　138

7　辛部

〔辛〕辛未　2
辛巳　106

7　辰部

〔辰〕辰の時　36

7　辵部

〔迎〕迎接　154
〔返〕五六返　75
〔逆〕逆（入濁）鱗　2
〔送〕葬送　100
〔退〕不退　27　122
〔迹〕垂迹　82
〔造〕所造　160
〔進〕精進　88
〔道〕道俗　12
大宮入道　86
惟方入道　96
道　116
道俗　128

〔遍〕光明遍照　119　134
十餘遍
〔遊〕遊戯す　21　137
〔遁〕遁朝　88
〔遺〕遺骨　84
〔選〕選擇集　160
〔遷〕遷化　78
〔還〕還帰　4

7　邑部

〔部〕一部　156

7　酉部

〔酉〕酉尅　123

7　釆部

〔釋〕釋尊　9　78
釋尊　144　147

7　里部

〔重〕十重戒　89
重く　162

8　金部

〔鎮〕慈圓慈鎮和尚　6

〔鐘〕 鳧鐘（フシュ） 93

8 門部

〔門〕 門弟（カイケン） 83
〔開〕 開眼（カイゲン） 156
開題（カイダイ） 156
〔間〕 世間（ムケン） 83
無間なり（イッカン） 124
〔閑〕 幽閑（ユウカン） 14

8 阜部

〔防〕 周防守（スワウノカミ） 94
〔阿〕 阿弥陀佛 39
阿弥陀如来 111
〔陀〕 頭陀（ッタ） 29
阿弥陀佛 39
阿弥陀如来 111
弥陀 48 80
〔院〕 院宣（インセン） 5
阿弥陀如来 111
〔陰〕 中陰（チウイン） 84
〔隆〕 兼隆朝臣（カネタカノアソン） 118
〔隠〕 隠居（インキヨ） 4

8 隹部

〔集〕 参集（サンシュ）せる 128

〔雑〕 雑善 152
選擇集（センチャク） 160

8 雨部

〔雲〕 雲（クモ） 9 20 66
雲客（ウンカク） 19 118
紫雲（シウン） 64 69

9 面部

〔面〕 頭北面西（ッホクメンサイ） 133
面謁（メンカツ） 162

9 音部

〔音〕 観音 43 82
助音（ショイン） 125 125
〔韻〕 蓮韻（レンイン） 93

9 頁部

〔順〕 順徳天皇（シュントクテンワウ） 5
〔頭〕 烏頭變毛（ウトヘンモウ） 3
頭陀（ッタ） 29
頭北面西（ッホクメンサイ） 133
〔顔〕 龍顔（レンカン） 2
〔題〕 開題（カイダイ） 156
〔願〕 祈願（キグワン）したまひ 111

9 風部

〔風〕 風（カゼ） 81
風俗（フウゾク）（入濁） 84

9 食部

〔養〕 供養（クヤウ） 12 86
孝養（コーヤウ） 153
〔餘〕 三千餘人（ヨ） 14
十餘季（ヨ） 53
八十餘字（ヨ） 114
十餘遍（ヨ） 137

10 馬部

〔験〕 功験（コウケン） 151

10 骨部

〔骨〕 遺骨（キコツ） 84

10 高部

〔高〕 貴賤高卑（キセンカウヒ） 15
高聲（カウシャウ）念仏 27 36 38 122
高聲念仏 124
高聲念佛 127

11 魚部

高聲（カウシャウ） 131
〔鮮〕 鮮潔（センケツ）なり 67
〔鱗〕 逆（ギャク）（入濁）鱗（リン） 2

11 鳥部

〔鳧〕 鳧鐘（フシュ） 93
〔鳳〕 鳳城（ホウシャウ） 4

16 龍部

〔龍〕 龍顔（レンカン） 2